

# 像メディア評価学の手ほどきと最新動向

## 小特集編集にあたって

編集チームリーダー 石井孝明

1953年2月1日は日本放送協会（NHK）が白黒テレビの本放送を開始した日であり、その後1960年にカラーテレビ放送が開始、今年で放送開始60年を迎える。この記念すべき年（還暦）に、更に新たなメディアの開拓に資する像評価の最先端技術に関する小特集を組めることは誠に光栄である。走査線の数も従来のNTSC方式では525本であったが、ハイビジョンでは1,080本とほぼ倍になった。そして更に2,160本、4,320本と倍々で技術が進んできている。この高解像度はどのくらいすごいことなのであろうか？

2012年7月28日から8月12日にかけて、NHKによるロンドンオリンピックのスーパーハイビジョン映像がパブリックビューイングにおいて公開され、幸いにして渋谷で視聴する機会を得た。映画館のような大きなスクリーンに投影された極めて綺麗な映像に22.2chのマルチチャンネル音響もあいまって、圧倒的な迫力と臨場感に感動したことを今でも覚えている。フルハイビジョンの16倍の超高精細映像の実力を実感した瞬間であった。この感動はどのように評価できるのだろうか。解像度がより上がるにつれてその映像の品質がどう向上したのかという評価が今後ますます重要になることは論を待たない。

本小特集では、画像評価の基礎となる考え方をはじめ、画像の入力から伝送、表示に至る各段階における画

像品質を決定する要因とその評価技術の全体像を紹介する。また、新映像メディアの開発動向と、そこにおける画像評価の課題について解説する。

人間の目で感じる映像の分解能と画面の解像度との関係は、画面の大きさや画面と視聴者との距離によって変わる。大画面を近距離で視聴する場合にはスーパーハイビジョンは必要であろう。一方、普通の大きさの画面を自宅で視聴する場合に、スーパーハイビジョンがどのくらい必要とされるのかについては意見が分かれるかもしれない。しかし、通常の視力では測り切れない視覚の能力は、なお、研究途上であり、例えば、プラネタリウムの世界では、6等星よりも暗く認識できないと言われる星も再現したメガスターが作られている。知覚できないとされていてもそこに何かが存在する限り、それを再現することによって人間が何かを感じる可能性がないわけではないだろう。スーパーハイビジョンの次の世界が見えてくるかもしれない。

スーパーハイビジョン対応の液晶ディスプレイの開発は着々と進んでおり、試験放送も間もなくとされている。もしも2020年夏季オリンピックが東京開催になり価格が手頃になれば普及に弾みがつく可能性がある。本小特集が映像の評価の理解に少しでも役立てば幸いである。

末筆ながら、御多忙にもかかわらず御執筆下さいました著者の皆様、本企画を進めるにあたって精力的に御尽力賜りました比留間委員をはじめ御協力頂いた小特集編集チームの皆様、学会事務局の皆様がこの場を借りて心より感謝申し上げます。

小特集編集チーム	石井 孝明	一色 剛	高島 康裕	小室 信喜	高橋 篤司
	田中 雄一	外川 太郎	中口 俊哉	比留間伸行	藤田 邦彦
	前田 義信	美谷周二朗	森田 純哉	山中 克久	